# バルセロナ雑感

栗　原　尚　子

近年，アントニオ・ガウディ（1852－1920）が日本においても注目を集めている。彼の代表的な建築物であるバルセロナのサグラーダ・ファミリア贖罪聖堂が，某洋酒メーカーのコマーシャルに登場したのもその表厚的な一面であろう。日本のガウディ研究の端緒は，今井兼次氏によって拓かれ，その後，東野芳明，栗田勇，栗津潔等の諸氏により，彼の造り出す「世界」について研究が積み重ねられてきている。

私自身，ガウディの作品をすべて目にしたわけではない。バルセロナを初めて訪れた1977年秋，これだけは目にしておこうと出かけたが，サグラーダ・ファミリア贖罪聖堂であった。「出会い」から何を得るのか，私自身がためされる瞬間であり，この緊張感と期待感にみちて前に立ったとき，私を襲ったのは，困惑でしかなかった。何をどうみるのか糸口が全くない自分に，ただ視界に入ってくる建築の「かたまり」にたちつくすだけだったのである。今のところ手に負えない「世界」との　遇であった。ガウディの作品が，「合理主義的傾向へのレトリックの虜となりつつある建築やデザインの世界にとって，あらゆる問いを発する根源であり」，生物学的原理をとりいれた表現世界は「人間主体に溶くかかわる空間の構造」であることを，言葉として理解できたのは，後に，彼に関する書物を通じてである。現代建築のかかえる問題に関して，経済効率と機能主義によって造りだされる建築物に異和感を感ずる程度の知識しか持ち合わせていない私にもっと，関心のあるのは，ガウディが生きた時間と空間である。今回，彼に関する文献を少しづつ読みはじめて，彼が「カタルーニャ探訪協会」にかかわっていたことを知った。昨年，スペインにおける近代地理学の受容についての一端を明らかにすべく，マドリッド地理学協会に関して論文を書いたとき，他の地域における同様の問題として気になっていたのがバルセロナであり，その中でも注目されたのが，この「カタルーニャ探訪協会」であったのである。カタルーニャの再発見をフィールド調査を通じて行うという目的をもったものであり，それは，当時のカタルーニャにおける Regionalism の運動の一貫をなすものであった。カタルーニャの歴史に，自然に，カタルーニャの地域社会の形成の根源を求めるのが，単に狭あいな「地域主体」にすることなく，当時スペイン社会に侵透しつつあった「近代」に対置しうるものをさぐりだす可能性をもつものであったのかどうか，あるいはバルセロナという「地域」のみに固有な土着的な倒面しかもちえないものであったのか最も関心のあるところである。ガウディの「世界」はこの一つの手がかりとなるかも知れない。初めて，ガウディに遇した時，バルセロナは，フランコ体制終焉後，自治を求める地域広域にわきかえっていた。赤と黄色の旗が家々の窓を飾っていたのは，何か象徴的であった。

# ランドサットマップの製作について

渡　辺　真紀子

縁あって，10万分の1ランドサットマップの製作に参画することになった。ランドサット5号から送られてくる TM データにもとづいて，110km×80kmの広域がメルカトル図法に展開，図化されている。図幅は現在「東京とその周辺」，「阿蘇山とその周辺」，「伊豆富士及箱根」，「大阪とその周辺」の4種類が発行されており[1]，僭越ながらこれらの“地理案内”と題する解説を担当してい

る。

従来のランドサットマップ[2]との大きな違いは，画像データの印刷工程で光学系を通さずに，磁気テープに収められているデジタルデータから直接印刷の原板となる網を製造する新しい手法を用いていることである。この手法のメリットは，地図の幾何学的精度が高まる点と，鮮明化した画像の劣化を防ぐという2点にある。また，TM 画像は光の回折，散乱によってにじみやぼけを生ずるが，これらを除去するために“5行5列の畳込み演算”と呼ばれる修正が施され，橋や道路などの線状目標物まで鮮明化した画像を得ている。

TM データは7つの波長領域（バンド）画像から構成されているが，7つの中から3つのバンド画像を選び，それに3原色を割り当てて作られる210通りのカラー合成画像の比較検討がなされ，最終的に中間赤外カラー画像Ⅱと名づけられた画像が採用されている。従来のランドサットマップに比べ，長波長のバンドを採用しているが，地上の目標物の反射特性が異なるだけで，解像度は従来のものと変わらない。TM 7バンドに赤，TM 4バンドに緑，TM 1バンドに青を配色し，合成された画像は，山間部と市街地のコントラストが強く，特に植物が明るい緑に表現されている。全体に色彩感に富むが，絵画的イメージを与え，より自然な感触を表現するにはまだ改良の余地が残されている。

画像情報を損わないために，地名の印刷は河川や港湾など最小限にとどめ，地図の外側に地形名や市町村名などを記載した切図を添える配慮を加えている。さらに，地図には国土地理院発行の1：50,000地形図の区画に相当する方眼が0.1㎜の太さ（1号線）で正確に描かれており，地形図との比較に便利である。

地理案内は，こうして作成された地図の中に発見される事象にもとずき，地形，地質，植物，歴史などを総合する地域の説明を試みたものである。城下町のグリッドパターン，湾岸の人工地形，地質構造線に沿った地形の配列，ゴルフ場の造成による丘陵地形の改変，植物相の変化など，精度が高いだけに判読の深みが増し，鮮明な色彩が興味をそそいでくれる。地理教育の教材には迫力満点である。拙い解説文を書きながら，楽しく勉強させてもらっている。

注1）10万分の1ランドサットマップ「東京とその周辺」，東京印書館，1985年8月他。

注2）10万分の1ランドサットマップ関東甲信越，東海大学情報技術センター，1984年9月，10万分の1衛星画像図「金沢」，国土地理院，1985年3月他。

## 国民性，民族性，地域性

太田　勇

スポーツの世界では体力がものをいう場面が多いためか，「外人特有の」と表現する説明をしばしば見受ける。プロ野球界で「外人特有のパワー」と言えば，アメリカ世界の非アジア系選手についてのみ使われる。ガイジンは白人，黒人およびその混血に限られ，台湾や韓国の出身者は当然のように除外されてしまう。しかしバレーボールになるとアジア勢が強く，「中国人らしい」柔軟な体とか，「韓国人独特の」ねばりという表現が出て来る。けれども，柔軟やバネの強さは，陸上競技やバスケットボールでは「黒人独特」なのである。この類いのステレオタイプ化は，まことに御都合主義に見えるが，スポーツ愛好者には好まれるらしい。ある特徴が本当に特定の人種・民族・国民に固有か否かを考えるのは，楽しみごとには野暮なのであろう。

このような内容の吟味が無いまま貼られたラベルは，たとえそれが誉め言葉であっても，つねに当事者を喜ばせるとは限らない。黒人はスポーツと音楽の才に長けるとの定評に，どれだけアメリカ黒人が反発して来たことであろうか。長い間の人種差別がもたらした結果としての特定職業での